



# Dale Pastoral Center

## DPC ニュースレター

2021年6月1日 第6号

### The Invisible String

DPC 所員 小嶋 リベカ



10年ほど前にドイツに滞在し、知り合ったご夫妻がいます。月日を経て、Sieではなく、親しみを込めてDuと呼び合う関係に変化しました。よく礼拝後にご自宅に招いてくださり、日本のことやご夫妻が描く絵画について語り合いました。

2011年、東日本大震災が発生した後の3月13日の礼拝で、ご夫妻は、石巻市内のある教会への義援金を呼びかけました。その日もご夫妻のご自宅に招かれました。ふと見た居間の置き時計は日本時間に合わせられていました。日本のことを祈りに覚え、可能な限り思いを寄せるご夫妻の姿勢に、私は心を強く揺さぶられました。

『The Invisible String』(Patrice Karst,

DeVorss&Company, 2000)という絵本があります。ある出来事をきっかけに不安と怖れを抱いた子ども達に対し、母親が人と人との間に《invisible strings》(見えないつながり)が存在するのだと語ります。物理的に離れていたとしても、そのつながりは誰もがそれぞれもっていて、大切な「誰か」と結びつき、その「誰か」が他の大切な「誰か」と結びつき、…無限につながりを結んでいき得るのだと語ります。互いに思い合うことが、確かなこととして感じられるならば、恐れや不安は和らいでいき得るのです。そして“…no one is ever alone”と、安心した子どもたちの表情とともに絵本は終わられます。

COVID-19の状況下、私の働くがん治療専門の病院では、入院患者は面会が禁止され、ベッドの周囲は終始カーテンでの隔離が義務づけられています。このような接触の制限は、1年以上続いています。そんななか、抱える恐れや不安の思いとの折り合いをつけるお一人お一人の姿に出会います。ある長期入院の患者さんは、2週間ごとに配布される病院食の献立表を家族にも送り、家族はその日のメニューで1品は同じものを食べることにしたそうです。会えないけれど、互いに孤食感がないと笑って教えてくれました。またある幼い子のお母さんは、入院前に親子でお揃いの小さなお守りを準備し、夜はそのお守りをそれぞれが握りしめて寝ることを日課としたそうです。母子が物理的に離れていても、「ママと一緒に寝てみたい」と安心して夜を過ごせるようになった娘の成長を誇らしげに教えてくれました。人と人、心と心をつなげる《invisible strings》は、確かに在るのです。

デール・パストラル・センターではスピリチュアルなことを深く知り、それを人と人、心と心とで分かち合うプログラムを提供しています。《invisible strings》は祈りだとも言えます。No one is ever alone を約束してくださる大きな恵みのなかで、私たちも祈りつつ、他者の思いに寄り添える働きを重ねていけることを願っております。

## 第4回臨床牧会セミナー（第55回教職神学セミナー）報告

### 全体主題「いま、教会の牧会は～ COVID-19 の只中で見ていること～」

過去3回の同セミナーは三鷹の神学校キャンパスに於いて二泊三日のプログラムを持って実施してきたが、今年はオンラインでの取り組みとした。2月8日・15日・22日（月）の午後、2時間半ほどの時間で、講演とグループ討議を合わせた形でのプログラム。直面している牧会の課題を考える場となった。ここでは、講師の講演をきっかけにどんな学びがなされたかをまとめて報告したい。（報告：石居基夫）

#### 【第1日目】

講師には、日本基督教団吉祥寺教会牧師で、現在日本ルーテル神学校で「牧会学」を担当されている吉岡光人先生をお迎えした。「新しい牧会様式」をテーマとして、昨年からの新型コロナウイルス禍が、どのように教会、特に牧会の状況に影響をもたらしているのか整理し、その課題とそこに見出されている可能性について発題いただいた。

感染症の特質として、人と人が会うこと、集まること、会話すること、食事を共にすることなどが避けられることになった。いずれも教会の活動の中心的な活動に自粛が求められたことで、大きなチャレンジを受けてきた。

当然に、礼拝や集会を通常の形で持つことが困難になったのであるが、その中で、日本中の教会で、制限された活動形態をとりながら、同時に礼拝、特に説教をオンラインで配信するなど新しい動きと可能性が生まれてきている。

こうした教会活動のオンライン化は、デジタル格差と言われる課題を生み出してもいるのだが、これまでのWebの伝道的な取り組みとは異なり、教会員のために新しく整えられたことによって、今まで教会に来ることができなかった方々を礼拝に結び合わせたり、家庭の中に礼拝が入り込むことで新しい伝道や証が起こっていくということも経験されている。

ただやはり、信徒の方々が孤立化し、あるいは経済的にも生活の面でも大きな困難が襲っていること、それが精神的にも家族の関係の中にも

様々な課題をもたらしているのも事実だ。

いずれにしても、こうした状況は、単に感染症による一過性のことではなく、現代社会の根本的問題が炙り出されてきたものだと指摘された。都市化して、さらにメディアやAIなどによって人々の生活や関係のあり方、いや人間そのものに変化しているという視点から、改めて教会とは何か、礼拝、説教とは何かという本質的な問いが生まれている。そして、なんとといっても人と人とが実際にふれあい、共にあるということの重要性、そこでこそ福音が証され、分かち合われ、生かされていく恵みがあることが確認されてきていることなどが話し合われてきた。そうした脈絡の中、 sacramentの理解など神学的な課題は、教会の本質論とも深く結びついて新しい言葉で語られるべき重要な課題となっていることが浮かび上がってきたように思う。

#### 【第2日目】

2日目の講師には日本福音ルーテル教会の関連である社会福祉法人デンマーク牧場福祉会（静岡県袋井市）こひつじ診療所で精神科医として働く武井陽一医師を迎えた。テーマは「見よ、今や恵みの時、見よ、今こそ救いの日～豊かなる大地に守られながら、一人ひとりに寄り添って～」。

まず、最初に武井先生ご自身がイエス・キリストにある救いの約束、終末への信頼から、困難と暗闇が続いているように感じられる現実の中にあってもなお希望の中に信仰の歩みが与えられ

ている喜びの証しをいただきながら、デンマーク牧場の設立の理念と実践を紹介された。広い敷地に豊かな自然が広がり、そして羊や牛などの動物たちとともにあるデンマーク牧場で、私たちは神の被造物として生きるその本来の恵みを感じさせられる。そこに自立援助ホーム、就労支援、児童養護施設、特別養護老人ホームなどが広く展開されている。武井先生は一人ひとりと向かい合い働く中に第三者の眼差し、すなわち神とイエスさま、また天国にある人たち、さらにはさまざまな困難と課題の中に生きている方々の眼差しを感じる事の大切さを語られ、また逆に私たちがいま誰を思い、祈るのかという課題の中にあることを示された。

現代を共に生きる人々とその苦しみへの深い関心を持つことが、全ての人に開かれた私たち自身の在り方を生み出し、また、それぞれの人がそこに安心して生きていく居場所を作っていく。私たちはコミュニケーションの破壊と自分の特定な関心事への依存の中で、主体的な自由を生きられなくなっている現実があるのかもしれない。神と人と自然を愛し、その深い関係のなかで厳しさと恵みとに出会いつつ、「自分の弱さを受け入れ、心を開きあう」関係が築かれていく。デンマーク牧場での、一人ひとりに働きかける実践的格闘に学ぶことは多いと感じられた。

### 【第3日目】

この日の講師は、日本ルーテル教団鶴沼めぐみルーテル教会教職である梁熙梅先生。教会の女性たちの視点から話していただきたいというリクエストに応じて「コロナ禍の中の教会の在り方～マルタたちの居場所 イエスのキッチン～」という発題をいただいた。

最初期の教会は、家のエクレスシアとして始まっていく。例えばヨハネ福音書では、マルタが兄弟ラザロの亡くなったときにイエスを迎え、その深い悲しみの中で直接に主に問い、終末また死と復活について主と対話したと記されている。その時

代から今に至るまで「もてなし」、「癒し」、「共同の食事」など教会の大切な働きを支えてきたのは女性たちであり、それが伝統的役割であったわけだが、その古い家父長制の中にあっても女性もまた主に問い、みことばを聞いて、預言者として働いてきたことなどが説き起こされた。

今、礼拝、集会など教会の活動が全てオンライン化することで、女性たちが担ってきたこれまでの多くの活動は制限を受け、相互の交わりが失われていくような現実が確かにある。しかし、女性たちはこの只中で電話や訪問などによってお互いに助け合い、また牧師を支えて、コロナ禍にも拘らず、実は相互牧会を実現している。

礼拝の中止やオンラインでの配信という実態がありつつも、社会の中に置かれている教会の役割は、このような暗い状況の中だからこそ、礼拝の恵みとしての死と復活の福音を示し、希望の光を灯していくべきと、本質論から問い直された。

本来「礼拝」は礼拝としてだけ存在するのではなくて、それを中心とした教会の全ての働き、招き、集まって、共にみことばを聞き、そして働き、生きるというその脈絡の上にあることでこそ実現される福音宣教なのだ確認された。そして、その「礼拝」そのものも、「交わり」、「奉仕」、「教育的な働き」という日々の教会生活によって豊かにされ、しっかりとその恵みが受け取られてきたのだし、そのほとんどを実は女性たちが支えてきたということ覚えられるべきではないか。

男性か女性かということが問題の核ではないけれど、この視点を持って見ることで、改めて深く「教会の本質」が捉え直されてきたように思う。

それこそオンラインでの開催ということで、出会えない寂しさもあったが、日本全国から参加をいただいたことは恵みの一つ。地方の教会と都市部の教会との違いなどについても改めて気づかされることも多かった。今後さらに深めていく課題を見出したセミナーだった。感謝して、3日間の臨床牧会セミナーのまとめとしたい。



## この1冊

### 「静まりから生まれるもの 信仰生活についての三つの霊想」

ヘンリ・ナウエン著 太田和功一訳

(あめんどう 990円)



この短く読みやすく、しかも心にしみる著作はナウエン初期の著作とのこと。ある教会でなされた三つの説教をもとに霊的深まりへの招きとして1974年に出版されました。瑞々しい招きの言葉にハッとさせられながら読み通せます。今から10年程前、ある黙想会の経験によって静まりの恵みを知り、これはいったい何なのかと探っていた頃この本に出会いました。見失っていた場所にやっと戻って来たような感覚で読みました。以来、私にとっては黙想のガイドブックのような一冊として、折々に立ち戻る場所となりました。

本書は三つの霊想からなり、それぞれの冒頭に御言葉が配置されています。これらの御言葉を静まりのうちに思い巡らして著者がいただいたその実りを共に味わう体となっています。それは、静まりといたわりと待ち望みによって生きる信仰生活です。それによって「創造的に生きることができ」ることが示されます。私にとっては迂闊だった自分の生活を顧みることとなりました。「独りきりになれる場所を持たなければ、自分の生活が危うくなることに、わたしたちはうすうす気づいています。」とあります。誰しもうすうす気づいてはいるけれど、見ないふりをしていた静まりの生活なのでしょう。どれほど静まりが大切か、その静まりに招かれていることに気づかせてくれます。

教会での黙想会で用いたことがありました。神学校の修養会のテキストブックとしても用いたことがありました。共に読み進め、分かち合い、そこから沈黙の時間に入るなら、私たちがいかに静まりの宝を見過ごしてきたかが分かるでしょう。

DPCが主催する各セミナーを通して今知らされるのは、COVID-19による苦悩する姿が信徒や教職にあることです。このときにこそ、静まりといたわりと待ち望みが必要だと知らされます。本書によって共に気づきを与えられたいと願います。

短いのがいい、深いのがいい、広やかさがいい、静まってみたくなる本です。

(DPC所長 齋藤 衛)



デール・パストラル・センター（ソーシャル部門）主催

#### 「だいじな人をなくした子どもの集まり」と「だいじな人をなくした子どもの保護者の集まり」

身近な人をなくした子どもたちが、同じような体験をした友達と一緒に言葉では伝えにくい思いを遊びの中で表現できる集まりです。DPCホームページ「論文・研究発表」にて活動の詳細をお読みいただけます。

今後の日程：7月17日、9月25日、11月27日、2022年1月22日、3月26日（すべて土曜日 13:30-16:00）

必要な方にぜひご紹介ください。お申込み：電話：080-9682-7830 Email：atsumari.g.7830@softbank.ne.jp

#### ☆編集後記☆

COVID-19の影響でDPCでもさまざまな活動が制限されています。中でも発信し続けることが必要であるのに力が足りず通常の半分である4ページのニュースレターをお届けすることは残念なことです。しかし一方でオンラインであるからこそ可能なつながりも見出して希望を与えられています。それぞれの場所で皆様のご健康が守られますように。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：齋藤 衛

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580 (直通) E-mail: dpc@luther.ac.jp http://www.luther.ac.jp/